

G7-06

## 図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）における鑑賞授業の充実を目指して

### 研究の概要

小学校図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科（美術、工芸）において、「A表現」の活動に対し「B鑑賞」の活動が充実しているとは言えない現状がある。鑑賞の充実が叫ばれて久しいが、効果的な鑑賞授業が行われたり、美術館や地域の作家等と連携が行われていたりする実践例は多くない。そこで、鑑賞授業の課題を明らかにするために、岡山下（岡山市を除く）公立の小学校、中学校、中等教育学校及び県立の高等学校の図画工作・美術担当教師を対象に「鑑賞授業に関するアンケート」を実施した。その結果を分析し課題を捉え、現行学習指導要領及び次期学習指導要領改訂の方向性も加味した鑑賞授業に関するリーフレットを作成し、鑑賞授業の充実を目指す。

### キーワード

鑑賞、表現と組み合わせた鑑賞、独立した鑑賞、相互鑑賞、授業づくり

### 目次

I はじめに……………1	3 リーフレットの作成
II 研究の目的……………1	『鑑賞授業』はじめの一歩』の作成…4
III 研究の内容……………2	(1) 表現と鑑賞の関係について ……5
1 鑑賞授業の現状と課題……………2	(2) 鑑賞授業の工夫について ……5
(1) 鑑賞授業に対する教師の意識……………3	(3) 鑑賞授業のQ & Aについて……………5
(2) 鑑賞授業の実施方法と時間……………3	IV 考察 ……5
(3) 美術館・博物館、地域との連携……………3	1 鑑賞授業実践から ……5
(4) アンケートの結果から……………4	2 今後の課題について ……6
2 鑑賞授業を充実させるために……………4	V おわりに ……6

# 図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸） における鑑賞授業の充実を目指して

## 目的

小学校図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科（美術、工芸）において、「A表現」に対して「B鑑賞」の活動が充実していない現状から、本研究では、「鑑賞授業に関するアンケート」結果から、鑑賞授業に対する教師の課題を明確にし、それを基に鑑賞授業の基本的な考え方や実践例などを紹介する、鑑賞授業に関するリーフレット『「鑑賞授業」はじめての一步』を作成する。

## 内容

- ・「鑑賞授業に関するアンケート」から、鑑賞授業の実態や課題を把握  
（岡山市を除く、小・中学校、中等教育学校、県立高等学校の図画工作、美術担当者を対象に実施）
- ・アンケート結果から出た課題を基に、鑑賞授業に関するリーフレット作成

## 成果

### リーフレット『「鑑賞授業」はじめての一步』の提案



#### 内容

- 1 鑑賞授業について！
- 2 鑑賞授業ってどうやるの？
- 3 鑑賞授業を工夫してみましよう！
- 4 鑑賞授業についてのQ & A

研究概要、鑑賞授業に関するアンケートを基に、鑑賞授業の基本的な考え方や実践例などを紹介する。

アンケートの結果から出た課題や解決の方策等を研究紀要にまとめる。

「図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）  
における鑑賞授業の充実を目指して」

## 今後の展望

リーフレットを県内の小・中学校、中等教育学校、高等学校に配付したり、Webにアップしたりすることで、鑑賞授業の充実を目指す。また、岡山県総合教育センターの研修や学校力向上サポートキャラバン、カリキュラムサポート等で、より具体的な実践例などを紹介する。

# 図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）における鑑賞授業の充実を目指して

## I はじめに

小学校図画工作科と中学校美術科、高等学校芸術科（美術、工芸）には、「A表現」と「B鑑賞」の二つの活動がある。この二つの活動について、中学校学習指導要領解説美術編には「美術の創造活動は、生徒一人一人が自分の心情や考えを生き生きとイメージし、それを造形的に具体化する表現活動と、表現されたものなどを自分の目で直接とらえ、よさや美しさ、作者の心情などを感じ取り味わう鑑賞活動とがある」<sup>1)</sup>と記されている。また、小学校学習指導要領解説図画工作編には「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけられりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である」<sup>2)</sup>と記されている。このように、表現と鑑賞はお互いに補いながら高まっていくため、表現の活動と同様に鑑賞の活動も充実しなければならない。国立教育政策研究所が行った「小学校学習指導要領実施状況調査（2015年）」には、「我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中にある作品などの鑑賞の活動について、より効果的な言語活動を取り入れるなど、一層充実することが必要。」<sup>3)</sup>と記されており、他にも鑑賞の対象や鑑賞の方法を工夫した指導の充実にも触れられている。このことから、美術の働きや美術文化の理解、言語活動の充実なども含め、次期学習指導要領においても鑑賞の充実は重要視されるだろう。

岡山県では、充実した表現の活動の授業実践はあるが、表現と鑑賞が効果的に関連したり児童生徒にじっくり作品を鑑賞させ言語活動を通しながら深く感じ取ったりするような授業実践が少ないのが現状である。岡山県総合教育センター（以下、当センター）の研修講座や各校における公開授業の場で、鑑賞授業への苦手意識や鑑賞授業への知識不足、経験不足などの教師の声を聞くことがある。小学校では、鑑賞授業を重点的に学ぶ機会や図画工作を校内で研修する機会は少ない。中学校や高等学校では、美術担当教師が各校で1名しかいなかったり、非常勤講師が数校を兼務していたりするなど、鑑賞授業を実際に参観したり研修したりする機会が少ない。学力向上を考えると、図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）において表現と鑑賞がお互いに効果的に高まっていく授業が実践される必要がある。

そこで、本研究では、各校種の教師がもつ鑑賞授業の課題を「鑑賞授業に関するアンケート」調査から明らかにし、その課題から改善の方策を検討し、現行の学習指導要領及び次期学習指導要領改訂の方向性を踏まえて、鑑賞の授業改善のための手立てとして「鑑賞授業に関するリーフレット」を作成し、県内の学校に配付し広く鑑賞授業について周知することで、県全体の図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の担当教師の指導力向上を図りたい。

## II 研究の目的

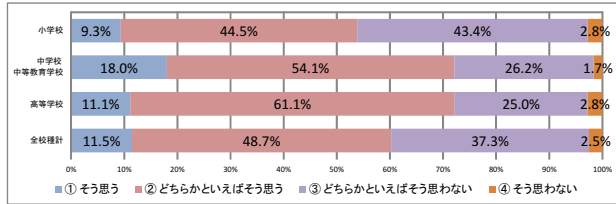
本研究の目的は、小学校図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科（美術、工芸）において鑑賞授業を充実させることである。そのために、「鑑賞授業に関するアンケート」を岡山県内（岡山市を除く）で実施し、各校種の教師の課題を明らかにする。鑑賞に対する知識不足や自信のなさ、授業の仕方が分からないといった課題が予測される。この調査の結果から見えた課題に対応する「鑑賞授業に関するリーフレット」を作成し県内の各学校に配付することで、各校種に対応するだけでなく、研修が受けにくい先生方に対しても課題解決の一助にしたい。本研究は県内（岡山市を除く）を対象に、小学校から高等学校まで独自調査を実施することから県内の傾向を知ることができ、それに対応するリーフレットを活用して、県内の鑑賞授業を充実させることにつながると考えている。また、現行学習指導要領の課題として挙げられる、生活の中の美術の働きや美術文化の理解を目指した鑑賞授業にも触れながら、表現と鑑賞の活動が効果的に高まっていく方向を示していきたい。

### Ⅲ 研究の内容

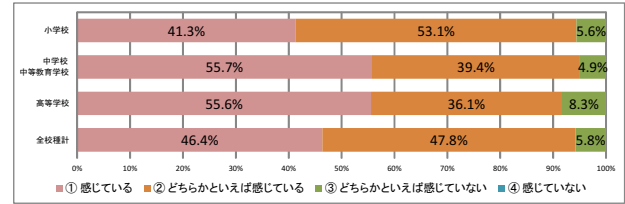
#### 1 鑑賞授業の現状と課題

今回、岡山市所管の学校を除く岡山県内公立の小学校、中学校、中等教育学校<sup>※1</sup>（以下中学校に含む）、県立高等学校の図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）担当教師各校1名を対象に「鑑賞授業に関するアンケート」を平成28年10月に実施した。調査した内容は、鑑賞授業に関する教師の意識、鑑賞授業の実態、鑑賞授業の内容、教材・教具、鑑賞の評価、美術館・博物館との連携、校種別選択の七つの種類に分け、27の質問を行った（回答率は小学校60.1%、中学校・中等教育学校51.7%、高等学校69.2%）。紙面上の都合で、その中から抜粋し結果を示す（図1）。

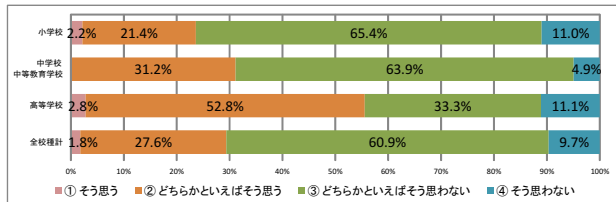
Q 1 鑑賞授業に積極的に取り組んでいると思うか



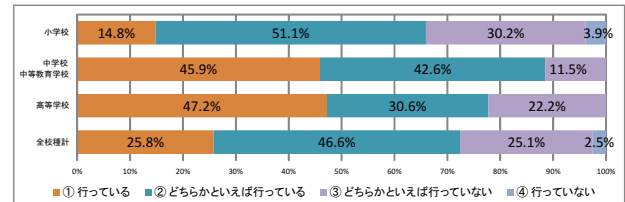
Q 2 鑑賞授業に有効性を感じているか



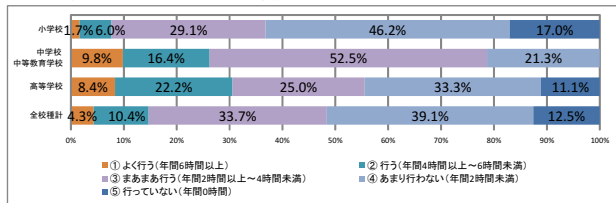
Q 3 鑑賞授業に自信があると思うか



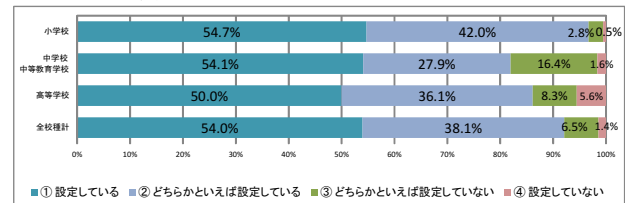
Q 4 表現と関連した鑑賞を行っているか



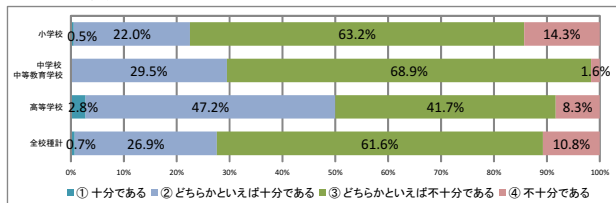
Q 5 表現とは独立した鑑賞を行っているか



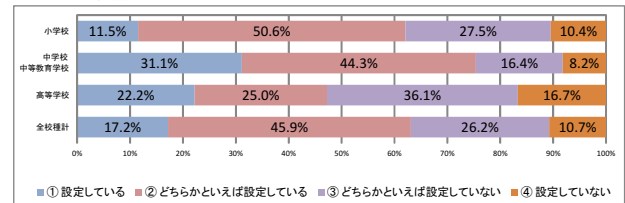
Q 6 相互鑑賞を行っているか



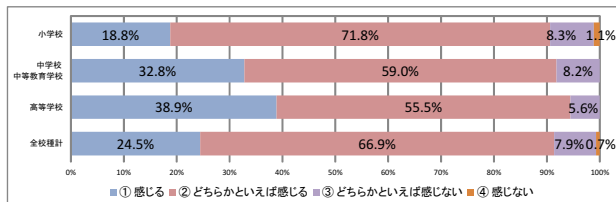
Q 7 鑑賞に充てる時間は十分か



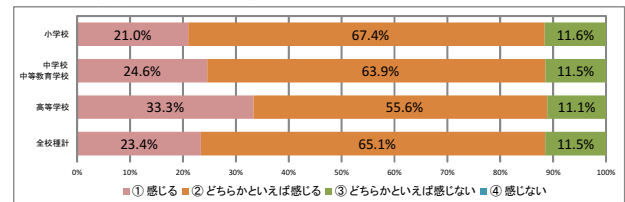
Q 8 鑑賞授業で話し合う活動を設定しているか



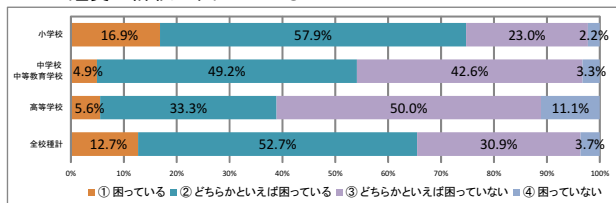
Q 9 経験するほど児童生徒の生見方や考え方が深まると感じるか



Q 10 鑑賞授業の学びが表現に生かされているか



Q 11 鑑賞の評価に困っているか



Q 12 美術館・博物館と連携を行っているか

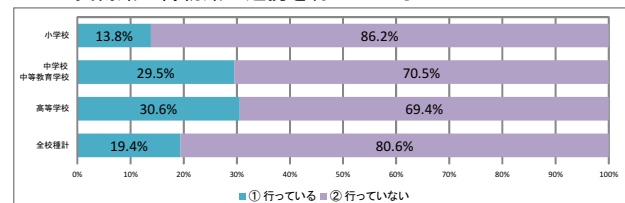


図1 「鑑賞授業に関するアンケート」結果

※ 小・中学校、中等教育学校、高等学校473校中279校回答  
※1 本研究では、中等教育学校とは中等教育学校前期課程のことである

### (1) 鑑賞授業に対する教師の意識

Q1「鑑賞授業に積極的に取り組んでいると思うか」の問いに対しては、肯定的な回答（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」）は中学校と高等学校では多いものの、小学校では否定的な回答（「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」）が46.1%あり、鑑賞授業に他校種に比べやや消極的な状況が読み取れる。Q2「鑑賞授業に有効性を感じているか」の問いに対しては、肯定的な回答（「感じている」「どちらかといえば感じている」）はどの校種でもかなり多い結果が出た。Q3「鑑賞授業に自信があると思うか」の問いに対しては、否定的な回答（「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」）が、小学校で76.4%、中学校で68.8%、高等学校で44.4%であった。また、図1以外に行った「鑑賞授業で困っていることは何か」の問いに対し、小学校で1番多かったのが「鑑賞授業に関する知識が乏しい」であり、中学校でも2番目に多かった。よって、特に小学校と中学校では、鑑賞授業に関する知識不足が原因の一つに挙げられると言えよう。

### (2) 鑑賞授業の実施方法と時間

Q4「表現と関連した鑑賞授業を行っているか」の問いに対しては、肯定的な回答（「行っている」「どちらかといえば行っている」）はどの校種でも多いが、小学校は否定的な回答（「どちらかといえば行っていない」「行っていない」）が34.0%であった。表現と関連した鑑賞授業が効果的に設定しきれていない現状が見える。Q5「表現とは独立した鑑賞を行っているか」の問いに対しては、否定的な回答（「行っていない（年間0時間）」「あまり行わない（年間2時間未満）」）が、小学校で63.2%、高等学校で44.4%であった。Q6「相互鑑賞を行っているか」の問いに対しては、肯定的な回答（「設定している」「どちらかといえば設定している」）がどの校種でも多く、特に小学校では96.7%とほとんどの学校で実施されているのが分かる。Q7の「鑑賞授業に充てる時間は十分か」の問いに対しては、否定的な回答（「どちらかといえば不十分である」「不十分である」）は、小学校で77.5%、中学校で70.5%、高等学校で50.0%であった。どの校種でも鑑賞に充てる授業は不十分と多くの教師は感じており、課題であることが分かる。「A表現」に対する「B鑑賞」の授業実施割合を同アンケートで調査したところ、鑑賞授業の割合は小学校は10%、中学校は15%、高等学校は10%が一番多かった。これは、授業時間が少ない中で、表現の活動を重視する傾向が強いことを示していると思われる。よって、表現を充実するには鑑賞の充実が大切であることを教師に説明する必要があるだろう。また、評価の4観点のうちの一つが「鑑賞の能力」であることからみても、この時間数で客観的な評価が可能かどうか不安である。Q8「鑑賞授業で話し合う活動を設定しているか」の問いに対しては、肯定的な回答（「設定している」「どちらかといえば設定している」）は、小学校で62.1%、中学校で75.4%に対し、高等学校では否定的な回答が52.8%であった。高等学校では、鑑賞授業において言語活動に十分取り組めていないことが分かる。Q11「鑑賞の評価に困っているか」の問いに対しては、「困っている」「どちらかといえば困っている」は、小学校で74.8%、中学校で54.1%と多かった。どのような課題を感じているかの問いに対し、すべての校種で「国語の力なのか鑑賞の能力なのか分からない」が多く、次に多かったのは小学校では「どのような力が付いたらよいか分からない」、中学校で「児童生徒の発言をどう読み取ればよいか分からない」であった。このことから、教師は、鑑賞授業で鑑賞の能力をどのように読み取りどう評価すればよいか課題を感じていることが分かる。

### (3) 美術館・博物館、地域との連携

Q12「美術館・博物館との連携を行っているか」の問いに対しては、「行っていない」は、小学校は86.2%、中学校は70.5%、高等学校は69.4%あり、連携が難しい現状が分かる。また、「どのような連携を行っているか」という問いに対して1番多かったのは、小学校は「行事等で引率する」、中学校は「部活動で引率する」、高等学校は「美術館レポート等の宿題として生徒各自で訪問させる」であった。また、地域の人材との連携も各校で行われていない結果が同アンケートから示されている。

#### (4) アンケートの結果から

以上から各校種別にアンケート結果をまとめたい。

小学校では、教師の多くが鑑賞授業の効果を認識しつつも、鑑賞授業への知識や経験不足から鑑賞授業への自信がもてていない。また、相互鑑賞は行っているが、表現と組み合わせた鑑賞授業<sup>※2</sup>や独立した鑑賞授業<sup>※3</sup>の設定が効果的にできていない状況にある。

中学校では、鑑賞授業に今までより積極的になっている。平成14年に県内の中学校美術科担当教師に行われた「鑑賞授業に関するアンケート」<sup>4)</sup>では、「積極的に取り組んだ」が6.7%、「やや積極的に取り組んだ」が14.4%、「ふつう」が40.0%、「やや消極的に取り組んだ」が26.7%、「消極的に取り組んだ」が12.2%であり、今回のQ1と比べると、「そう思う」が大幅に増え、「そう思わない」が大きく減少している。前回調査では選択肢に「ふつう」があり、回答の選択肢数が違うため一概には判断できないが、14年経って中学校の教師が鑑賞授業に、より積極的になっている姿が見えてくる。次に、鑑賞授業に対して自信があるかの問いについても上記アンケート<sup>4)</sup>で自信がないという課題が出ており、Q3の結果からも教師の鑑賞授業への苦手意識が依然として大きな課題であることが分かる。また、生徒に価値意識をもたせ、批評するような深い鑑賞までは達していない状況にある。

高等学校では、鑑賞授業への抵抗感は中学校に比べてあまりない。表現に対する鑑賞授業の割合は中学校より低いが、授業に充てる時間が十分だと考えている割合は高い。また、生徒に価値意識をもたせ、批評し合うような深い鑑賞や美術文化の理解に関する鑑賞はできていない。生徒の発達段階に応じた深い鑑賞ができていのかどうか課題である。

(※2は「表現と関連した鑑賞授業」、※3は「表現とは独立した鑑賞授業」のことである。以下同様)

## 2 鑑賞授業を充実させるために

アンケート結果から出た課題から、鑑賞授業を充実させるための方策を次の三点にまとめたい。

一点目は、当センターから鑑賞授業に関する考え方や知識を担当教師に的確に伝えることである。表現と鑑賞の関係を十分に教師に説明し、どのような力を児童生徒に身に付けさせるか提示するとともに、授業の内容や教材などを伝えていく必要がある。

二点目は、研究協力委員に課題に対応する授業を実践していただき、それをまとめて、実践例を示し、担当教師に鑑賞授業のイメージをもたせることである。リーフレットで授業を「表現と組み合わせた鑑賞（相互鑑賞を含む）」と「独立した鑑賞」に分け、それぞれの意義や方法を説明する。特に小学校では独立した鑑賞に取り組めていなかったり、中学校や高等学校では生徒に価値意識をもたせ、批評する鑑賞ができていなかったり、高等学校では言語活動を活用した鑑賞授業に取り組めていなかったりする現状から、「独立した鑑賞」を取り上げる。

三点目は、鑑賞授業に関する研修を行い、教師の授業改善を促すことである。当センターの希望研修である「魅力ある図工の授業づくり研修講座」と「中・高等学校美術研修講座」において、鑑賞をテーマにした研修や美術館を会場にした実地研修などを実施し、今回のアンケートや所員研究で作成した研究成果物を活用し、教師に鑑賞授業について紹介するとともに、生活の中の美術の働きや美術文化の理解についても紹介したい。

本研究では、上記の一点目と二点目を充実するために、今回「鑑賞授業に関するリーフレット」を作成する。三点目に対しては、作成したリーフレットを各研修で効果的に活用したり、当センターのWebページにリーフレットや実践例を紹介したりして、鑑賞授業に対しての理解が広がるように努めたい。

## 3 リーフレット『「鑑賞授業」はじめの一步』の作成

本研究におけるリーフレットは、中・高等学校の美術教師だけでなく初任者や講師（非常勤講師含む）の方や、全教科を指導する小学校教師の方にも分かりやすい内容で、このリーフレットを基に様々な鑑賞授業に挑戦する気持ちになるものにしたと考えた。よって、内容は深いところまで踏み込まず、鑑賞授業の基礎的な内容を紹介するものとした。

### (1) 表現と鑑賞の関係について

ここでは、表現と鑑賞は、お互いに一体的に補い合い高まっていくことを説明し、表現だけに偏るのではなく、効果的な鑑賞授業が表現に影響し、高まっていくことを押さえない。

また、その教材における表現と鑑賞の中心となる考え方を深め、図画工作、美術としての学びを明確にすることを重視する。

### (2) 鑑賞授業の工夫について

「相互鑑賞」を含んだ「表現と組み合わせた鑑賞」と「独立した鑑賞」等を紹介し、鑑賞授業のイメージを教師に掴んでもらえるような内容と、言語活動や鑑賞のタイミング、〔共通事項〕、次期学習指導要領改訂に向けた傾向やアクティブ・ラーニングの視点などをポイントとして掲載し、様々な工夫や効果的な授業展開が可能であることに気付くことができる内容にする。また、様々な鑑賞授業の工夫についても触れる。

### (3) 鑑賞授業のQ&Aについて

鑑賞して何を学び、どのような力を育むのかという鑑賞の評価についても触れたい。また、鑑賞の材料を紹介し、様々なものが鑑賞授業で提示できることについて教師に伝える。相互鑑賞の設定の仕方や方法についても触れる。以上の視点を考慮してリーフレットを作成する。

## IV 考察

### 1 鑑賞授業実践から

リーフレットに応じた鑑賞授業を協力委員の先生方に実践していただいた。いずれも「独立した鑑賞」であり、作品のよさや美しさ、作者の心情や意図、表現の工夫などを感じ取ることを目標に児童生徒の発達段階に応じて行ったものである。特に小学校では、小学校学習指導要領に「指導の効果を高める必要がある場合には、児童や実態に応じて、鑑賞を独立して行うようにすること」<sup>5)</sup>と示されており、今後の「独立した鑑賞」に効果的に取り組む参考にしていただきたい。また、今回紹介する授業は、すべて県内の美術館で作成した鑑賞ツールを活用している点も特徴である。次に、授業実践を簡単に紹介する。

小学校の実践事例（第4学年）は、題材名「作品のよさやおもしろさを話し合おう」である。導入で、児童はアートカードを使ってパズルゲームを行った。楽しく遊びながらしっかり作品を見ることができていた。次に、1枚の作品をじっくり見せながら、画面に描かれているものやイメージをつかませ、その体験を基にカルタの読み札を考えさせた。児童は図2のように班で相談しながら意欲的に取り組み、ユニークな読み札を作成していった。最後に、自分たちで作成した読み札を使ってカルタ遊びを行った。児童は、級友の読み札から、もう一度作品をしっかり見て、今まで気付いていなかったところを見付けていた。

中学校の実践事例（第1学年）は、題材名「あなたは美術商！～遙邨さんを売り込め！～」である。生徒は3～4人のグループに分かれ、遙邨アートカードの中から自分たちが売り込みたい作品を1点選ぶ。そして、そのよさや魅力を個人で味わったり、グループ内で話し合ったりする。次に国語科の授業で、素晴らしいと感じた根拠を明確にししながら各自で紹介文を作成し、最後に図3のように美術科の授業で、他生徒に作品を提示しながら売り込む。この時、気に入った作品を生徒が買うという設定もあり、紹介された作品の中からお気に入りの作品を選んだ。生徒たちは、自分とは違う級友の視点の面白さに気付き、自分の見方を広げることができていた。



図2 読み札を考える

※4 岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会  
「国吉康雄の作品を使った絵札セット」を使用



図3 作品を紹介する

※5 倉敷市立美術館所蔵の池田遙邨の作品を使った  
「遙邨アートカード」を使用

高等学校の実践事例（第1学年）は、題材名「桃太郎絵巻上・下巻～How do we introduce our treasures to the foreigners?～」で外国の方に桃太郎絵巻を紹介する授業である。最初に、桃太郎絵巻をしっかりと鑑賞し物語や表現方法、絵巻物の特徴などを考えた。この授業のポイントは、外国の方に日本の美術を紹介する場面を設定することであり、これにより、生徒に日本の美術のよさをはっきりと認識する必要性が生まれ、主体的に学びを深めた。最後に、本時に絵巻物の特徴や物語について図4のように英語で発表した。授業の終わりに、外国の方から質問や感想をもらい、生徒は日本美術のよさが伝わったかどうか確認することができた。また、外国の方の国と日本の美術の違いについても生徒が紹介するなど美術文化の理解が深まっていた。



図4 絵巻物紹介

※6 岡山県立美術館所蔵作品「桃太郎絵巻（作者不詳）」を活用した美術館教育素材を使用

以上の授業実践では、どの授業も児童生徒が生き生きと主体的に鑑賞に取り組んでいた。それには、次の三点が影響していると考えられる。一点目は、魅力ある題材や作品と出会う仕掛けを設定していることである。小学校の実践ではゲーム、中学校の実践では作品の売り込み、高等学校の実践では外国の方への紹介の場の設定であり、児童生徒が興味をもって鑑賞できる仕掛けが設定されていた。二点目は、自分の見方や考え方を深める流れが設定されていたことである。児童生徒は、作品を鑑賞し自分の見方や考え方をもち、次に周りとの意見交換を通して自分と違った視点に気付き、その体験を生かしてもう一度自分の見方や考え方を深めていくのである。これにより、新たな発見があったり充実感を感じたりするとともに、実感的な理解を可能にしている。三点目は、目標に合わせて授業を工夫することである。作品の選択や提示方法、授業内の児童生徒の動きや動線など細部まで練られている。教師が児童生徒に何を学ばせるのかを明確にもって授業を工夫することで、児童生徒がやるべきことを理解でき授業に主体的に取り組んでいた。また、評価の観点も明確であった。このような視点についてもリーフレットで紹介する必要性がある。

## 2 今後の課題について

リーフレットを作成し、県内の学校に配付するだけでなく、今後どのようにして鑑賞授業の内容や展開方法などを紹介していくかが課題である。先に述べたように、当センターの研修講座で紹介することはもちろん、当センターに来所できない先生方のためにも、Webでも紹介する。そして、鑑賞授業について、より具体的な実践等を紹介していきたい。

## V おわりに

本研究では、アンケートの実施から鑑賞授業に対する課題を明確にすることができ、リーフレットの作成を通して、鑑賞授業の内容や授業展開方法、様々な工夫などを広く県内に広げていく機会を得ることができた。地域に美術館がある学校や学校数の多い地域では、鑑賞の公開授業や研修などがあるようだが、学校数の少ない地域や担当教師が限られている中学校や高等学校ではそれらの機会は極端に少ない。特に非常勤講師は、地域の教師との交流や当センターの研修にも参加しにくい状況にあり、授業の充実を目指すためにも鑑賞授業の基礎的な内容を紹介する機会を当センターが準備することは重要である。小学校でも、図画工作の研究や研修の機会が少ないと思われる。このような学校や教師へも支援を行うことに当センターの意義がある。以上のことから「鑑賞授業に関するリーフレット」の作成と配付には大きな意味があると考えられる。しかし、紙面での紹介では、提示できる情報も少なく、具体例を示すことに限りがある。リーフレットの作成までを研究としているが、今後はこのリーフレットを鑑賞授業と教師との出会いの仕掛けとしたい。また、様々な研究会や研修で鑑賞授業の実践を紹介し、先生方に鑑賞授業に興味をもってもらい実践へとつなげていきたい。そして、表現と鑑賞が補い合って高まっていくような授業改善を図りたいと考えている。



○引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説美術編』 p. 6
- 2) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説図画工作編』 pp. 6-7
- 3) 国立教育政策研究所 (2015) 『小学校学習指導要領実施状況調査』 p. 15
- 4) 平田朝一 (2003) 岡山大学大学院教育学研究科修士論文 pp. 7-8  
『美術科における鑑賞教育の普遍化を目指して－身近なものからの可能性－』  
※「鑑賞授業に関するアンケート (2002)」
- 5) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』 p. 74

○参考文献

- 1) 国立教育政策研究所 (2004) 『音楽等質問調査』
- 2) 文部科学省 (2009)  
『高等学校学習指導要領解説芸術 (音楽 美術 工芸 書道) 編音楽編美術編』

平成27・28年度岡山県総合教育センター所員研究  
(個別テーマ研究；小学校図画工作、中学校美術、高等学校芸術 (美術、工芸))  
「図画工作科、美術科、芸術科 (美術、工芸) における鑑賞授業の充実を目指して」  
研究委員会

指導助言者

村上 尚徳 環太平洋大学教授

協力委員

市川かおり 倉敷市立郷内中学校指導教諭  
後藤 晋 岡山県立岡山芳泉高等学校指導教諭  
赤木美貴恵 新見市立西方小学校教諭 (平成28年度)  
下川 愛子 赤磐市立磐梨小学校教諭 (平成27年度)

研究委員

佐藤 裕之 岡山県総合教育センター教科教育部長  
平田 朝一 岡山県総合教育センター教科教育部指導主事

平成29年2月発行

岡山県総合教育センター 研究紀要 第10号

研究番号16-02

図画工作科、美術科、芸術科 (美術、工芸) における鑑賞授業の充実を目指して

編集兼発行所 岡山県総合教育センター

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川7545-11

TEL (0866) 56-9101 FAX (0866) 56-9121

URL <http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/>

E-MAIL [kyoikuse@pref.okayama.lg.jp](mailto:kyoikuse@pref.okayama.lg.jp)